

絵本この一年、

話題満載

石井 光恵

二〇〇九年の絵本動向としては、①海外の翻訳絵本に優れたものが多く出た、②著名作家の旧作掘起し、復刻・再刊の動きが継続、③人気絵本作家を登用したシリーズの刊行ラッシュ、④内田麟太郎、谷川俊太郎の文章が集中して多い、⑤動きが活発で話題に事欠かなかったことなどが、特徴としてあげられるだろう。順次見ていこう。

二〇〇九年は、二〇〇八年と打って変わって、海外の翻訳絵本に優れたものが多く出た。待望の一冊、『ラストリゾート』（J・パトリック・ルイス文 ロベルト・インノチェンティ絵 青山南訳 B1出版）。この作品は二〇〇三年にポロニーヤ・ラガツツイ賞フィクション部門特別賞を受賞した作品なのに、なぜか翻訳が遅れていた。期待に違わず、イ

ケている。想像力をなくした画家が、想像力をさがしに出た旅で、行き着いたのが海辺の不思議なリゾートホテル。そこに泊まる客は、ハックルベリー・フィン、サンIIテグジュペリ、アンデルセンの人魚に、宝島のジョン・シルバ……。人類の想像力の偉業を称えながら、想像力の所在が疑わしくなった我々もまだ大丈夫と思わせてくれる。

ユリ・シュルヴィッツ作『おとうさんのちず』（さくまゆみこ訳 あすなろ書房）。戦争で故郷を追われたシュルヴィッツの子ども時代。食料もまともでない難民生活の中で、パンの代わりに父親が手に入れた一枚の地図。この地図がどれほど子どもの想像力を育てたかという物語。

『ないしょのおともだち』（ヒバリー・ドノフリオ文 バーバラ・マクリントック絵 福本友美子訳 ほるぷ出版）親子二代にわたって、女の子と家ねずみが内緒の友だちになる話。時を経て子どもは変わららず、不思議を見出す。バーバラ・マクリントックは、『ダニエルのふしぎな絵』（福本友美子訳 ほるぷ出版 二〇〇五年）以来注目の作家。

『カクレンボ・ジャクソン』（偕成社 二〇〇五年）から着実に人気を集めているデイヴィッド・ルーカスの『ほらぶきじゅうたん』（なががわちひろ訳 偕成社）も面白い。物語が展開される画面に書斎の小道具でフレームを作り、舞台仕立てで語る凝った演出で、すべてはモノクローム。長い眠りから覚めた大理石像の女の子フェイスとトラのじゅう